

---

# 荒川章二教員の退職にあたって

原山浩介

---

私は、「送る言葉」のたぐいを書くのは得意ではない。あまり無理なことを書くよりは、むしろ、これからの現代史研究を見通しながら、荒川氏の在任が私たちにとってどのような意味を持っていたのかを考えてみたい。

荒川氏が国立歴史民俗博物館に着任したのは、2013年4月だった。

定年まで5年間という短い在任期間にもかかわらず、無理を押し静岡大学を離れ、歴博に着任をお願いした。その背景には、荒川氏の研究者としての蓄積や能力に対する期待、そしてこれまでの大学での経験を活かして研究機関の管理・運営に参加してもらおうという期待がもちろんあった。しかし同時に、現代史研究者の年齢分布のいびつさゆえに若い教員を採用することがかなり難しかったという事情もある。

詳細に統計を取ったわけではないが、日々の研究活動や学会運営などを通じた実感でいえば、現代史研究者は荒川氏を含む世代がひとつの塊をなしており、その次の塊は現在の40代後半を中心とした私を含む世代になる。もちろん、両世代の間にも研究者はいるのだが、その数はあまり多くない。つまり荒川氏には、自らの研究や日々の業務の遂行に加えて、現代史研究全体の年齢構成の偏りを前提としたなかで、大学共同利用機関の役割を見通しながら、今後の現代史研究のパーспекティブを示していくという、非常に重要な役割を背負っていただいたということになる。

さて、歴博の教員紹介においては、荒川氏の主要研究課題として「近代日本の軍隊と地域関係史」と「戦後日本社会史」の二つが掲げられている。このうち、「軍隊と地域」については今さら説明の要はないほどによく知られており、当該研究領域についてさほど詳しいわけでもない私がここでとやかくいう必要はないだろう。ただ、もう一方の、「戦後日本社会史」については、一言付け加えておいても良いように思う。

2009年に小学館から刊行された『全集 日本の歴史 第16巻 豊かさへの渴望』は、荒川氏による通史的な仕事のひとつである。概ね1955年以降を扱った同書は、高度経済成長と消費社会化、その一方での公害と沖縄問題といったような、日本の戦後史を考える上で欠かすことの出来ない論点をきちんと押さえている。しかし、その上で同書の構成は、荒川氏自身の歴史研究の関心に強く裏打ちされている。「軍隊と地域」に関わる手法が同書でも用いられ、それは沖縄の問題、本土も含む基地問題といった形で具体的な叙述に結実している。これに加えてさらに、労働運動・社会運動への言及が、全体としてかなり多い印象がある。実は荒川氏の歴史への向き合い方のなかに、社会運動への関心が抜きがたく存在し、運動や抵抗とのせめぎ合いのなかで戦後の日本社会が作られてきたという一種の歴史観が、同書では強く示されている。

そもそも、荒川氏は社会運動に何を見ようとしていたのだろうか。学的な作業の根底にあるもの

---

---

を探り出すのは、そう簡単ではないし、私も自信をもって言えることがあるわけではない。ただ、私が勝手に、荒川氏の発想をくみ取るための手がかりにしているのは、彼が若い頃に『歴史評論』（1981年9月）に書いた、「地下鉄モグラ争議五〇周年同窓会参加記」という1ページものの文章の、最後の一文である。1932年に敢行された地下鉄ストライキをめぐり、それがどのように可能になったのかを、一定の共感をにじませながらまとめた上で、次のように結んでいる。

「なお、余談であるが、(当時の)女性たちの読書会では『女人芸術』など当時の婦人雑誌、小林多喜二を読んだが、現在の職場では、漫画とスポーツ新聞しか読まないという」

二十代の若い頃に書いた文章を、いまさらになって掘り出されるのはあるいは迷惑なことかもしれない。しかしここから私なりにくみ取るのは、荒川氏にとっての、多くの人びとが主体化の契機を獲得できないでいることへのもどかしさと、それゆえの、垣間見える抵抗・変革の可能性への共振である。

実は私は、同じような年齢の頃、研究室の紀要の片隅に書いた文章のなかで、「プチブルのための社会科学」というテーマを自らに課すことを宣言していた。「プチブル」などという言葉が簡単に使うことの適否はさておき、比較してみれば、荒川氏の世界の把握の仕方とはずいぶんと異なる。荒川氏を研究に駆り立てている原動力は、もっと直截な、抵抗と変革への予兆なのだろう。

その荒川氏が、歴博において二つの展示を実施した。ひとつは、2016年度の「台湾と日本—震災史とともにたどる近現代—」、もうひとつは、2017年度の「「1968年」—無数の問いの噴出の時代—」である。いずれの展示も、準備過程は荒川氏の独創／独走で進んだ部分が多い。その独創／独走は、荒川氏の二つの研究課題、すなわち「軍隊と地域」から派生した先にある植民地台湾への関心と、「戦後日本社会史」ならぬ社会運動への関心によって支えられたといえる。

このうち、「1968」の展示は、現代史研究においても大きな意味を持ったといえる。この展示は、大学闘争ならびに同時期の社会運動を幅広く扱った、画期的な展示であった。数多くの、ピラを含む資料群を示したことそのものの意義もあるのだが、同時に、未だしっかりと成立していない、1960年代から70年代の歴史叙述をどのように構成していくべきなのか、「1968」と称される現象をそこにどのように位置づけていくのか、という問いを、現代史研究の世界に投げかけたといえる。この課題は、おそらくは荒川氏の次世代、つまり私を含む世代に課せられた宿題といえるだろう。

冒頭で示した、次世代への橋渡しという役割を、展示を通じてなし得たことが、5年という短い在任期間の仕事の中で最も重く受け止めるべきものと考えている。おそらく、向こう10年から20年くらいの中に、「1968」をめぐる問題や論点の構成の仕方は大きく変わっていくだろう。歴博という場で、まさしく「問い」を投げかけたことに感謝しつつ、今後の学界の議論の活性化につなげていきたいと思う。

---

## 荒川章二年譜

- 1976年(昭和51年)  
3月 早稲田大学第一文学部人文専攻卒業
- 1978年(昭和53年)  
3月 立教大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了
- 1978年(昭和53年)  
4月 豊島区史編纂室主任調査員(～1983年3月)
- 1983年(昭和58年)  
3月 一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学
- 1983年(昭和58年)  
4月 日本学術振興会奨励研究員(～1984年3月)
- 1984年(昭和59年)  
4月 一橋大学大学院特別研修生(～1986年3月)
- 1985年(昭和60年)  
4月 立教大学文学部講師(兼任)(～1986年3月)
- 1985年(昭和60年)  
4月 法政大学大原社会問題研究所嘱託(～1986年3月)
- 1986年(昭和61年)  
4月 立教大学一般教育部講師(兼任)(～1987年3月)
- 1986年(昭和61年)  
4月 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員(～1988年3月。引き続き嘱託研究員として現在に至る)
- 1986年(昭和61年)  
4月 千葉大学教養部講師(兼任)(～1988年3月)
- 1987年(昭和62年)  
4月 白梅学園短期大学講師(兼任)(～1987年9月)
- 1987年(昭和62年)  
10月 立教大学一般教養部講師(兼任)(～1988年3月)
- 1988年(昭和63年)  
4月 静岡大学教育学部助教授(～1995年9月)  
\*1994年(平成6年)11月 静岡大学情報学部大学設置審議会教員組織審査 教授(専任)可
- 1995年(平成7年)  
10月 静岡大学教授情報学部教授
- 2001年(平成13年)  
9月 放送大学(静岡学習センター)客員教授(～2005年3月)
- 2003年(平成15年)  
4月 静岡大学情報学部社会学科長(～2004年3月)
- 2004年(平成16年)  
5月 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館客員教授(2007年3月)
- 2005年(平成17年)  
4月 静岡大学学長特別補佐(～2006年3月)
- 2006年(平成18年)  
4月 静岡大学中期計画検討会議委員(～2007年3月)
- 2007年(平成19年)
-

- 
- 4月 高知大学人文学部講師(兼任)(~2007年9月)  
2008年(平成20年)  
4月 静岡大学情報学部副学部長(~2010年3月)  
2008年(平成20年)  
4月 静岡大学教育研究評議会委員(~2013年3月)  
2010年(平成22年)  
4月 静岡大学情報学部長・情報学研究科長(~2013年3月。退職)  
2010年度(平成22年度)  
東海地区工学系学部長会議議長  
2011年度(平成23年度)  
53国立大学工学系学部長会議議長  
2013年(平成25年)  
4月 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授  
4月 静岡大学名誉教授  
2014年(平成26年)  
4月 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授(併任)  
2014年(平成26年)  
4月 国立歴史民俗博物館運営会議委員(~2018.3)  
2014年(平成26年)  
4月 早稲田大学文学部講師(兼任)(~2017.3)  
2018年(平成30年)  
3月 国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学定年退職

**国立歴史民俗博物館展示プロジェクト・共同研究・常設展示リニューアル委員等**

- 2001年度~2003年度(平成13~15年度)  
「近代日本兵士に関する諸問題の研究」(研究代表者 一ノ瀬俊也)  
2004年度~2006年度(平成16~18年度)  
「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」(研究代表者:関沢まゆみ)  
2004年度~2006年度(平成16~18年度)  
「20世紀における戦争I」(研究代表者:安田常雄)  
2006年1月~2011年3月(平成18年~23年)  
国立歴史民俗博物館第6室リニューアル委員  
2007年度~2009年度(平成19~21年度)  
「20世紀における戦争II」(研究代表者:安田常雄)  
2010年度~2012年度(平成22~24年度)  
「近現代展示における歴史叙述の検証と再構築」(研究代表者:原山浩介)  
2012年度~2015年度(平成24~27年度)  
「戦時/災害と生活世界の関わりに関する総合的研究」(研究代表者:原山浩介)  
2011年6月~2012年3月(平成23年~24年)  
総合展示第6展示室「現代」展示プロジェクト委員  
2012年7月~2013年3月(平成24年~25年)  
国立歴史民俗博物館総合展示第5室・第6室リニューアル委員(以後、当館教授として委員継続,~2018.3)  
2013年度~2015年度(平成25~27年度)  
基幹研究「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」(総括研究代表)  
2013年~2014年(平成25~26年)  
2013年度企画展示「歴史にみる震災」展示プロジェクト委員
-

---

**2013年度～2015年度**（平成25年度～27年度）

2015年度企画展示「ドイツと日本を結ぶもの―一日独修好150年の歴史」展示プロジェクト委員

**2014年度～2015年度**（平成26～27年度）

資料調査研究プロジェクト：軍事郵便資料（研究代表）

**2014年度～2015年度**（平成26～27年度）

「ドイツと日本を結ぶもの―一日独修好150年の歴史―」をめぐる研究交流」（事業主体者）

**2015年度～2016年度**（平成27～28年度）

2016年度第5・6展示室特集展示「台湾と日本―震災史とともにたどる近現代」展示プロジェクト代表

**2015年度～2017年度**（平成27～29年度）

「国立台湾歴史博物館との災害史をめぐる研究・展示構築プロジェクト」委員（事業主体者 原山浩介）

**2015年度～2017年度**（平成27～29年度）

基盤研究「『1968年』社会運動の資料と展示に関する総合的研究」（研究代表者）

**2015年度～2017年度**（平成27～29年度）

2017年度企画展示「『1968年』―無数の問いの噴出の時代」展示プロジェクト代表

**学会及び社会的活動****1978年**（昭和53年）

4月 豊島区史編纂室主任調査員（～1983年3月）

**1982年**（昭和57年）

4月 豊島区議会史編纂委員（～1986年2月）

**1989年**（平成1年）

6月 静岡県史編纂専門委員（～1998年3月）

**1989年**（平成元年）

10月 静岡県近代史研究会事務局長（～1996年10月）

**1992年**（平成3年）

4月 沼津市史編さん専門委員（2001年より近現代部会副部会長、～2008年3月）

**1992年**（平成3年）

4月 伊豆長岡町史編纂委員・専門委員（近現代編編集責任者～2005年3月）

**1994年**（平成6年）

4月 大学入試センター教科専門委員会委員（～1996年3月）

**1996年**（平成8年）

4月 新沖縄県史 沖縄戦部会執筆委員（～1996年12月）

**2000年**（平成12年）

7月（磐田市）竜洋町史編纂委員・専門委員長（～2009年3月）

**2000年**（平成12年）

11月 沼津市明治史料館協議会委員（～2008年10月）

**2003年**（平成15年）

10月 静岡県近代史研究会会長（～2013年10月）

**2006年**（平成18年）

4月 戸田村史編さん会議委員（沼津市教育委員会）・編集委員長

**2008年**（平成20年）

4月 山口県史現代史部会専門委員（政治社会編責任者～現在に至る）

**2008年**（平成20年）

12月 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員（～2010年11月）

**2012年**（平成24年）

5月 静岡県史編さん準備委員。8月より静岡県史編さん専門委員（～現在に至る）

---

2012年（平成24年）

12月 同時代史学会理事（～現在に至る）

2014年（平成26年）

1月 同時代史学会編集委員長（～2016年1月）

2014年（平成26年）

沖縄県史沖縄戦編執筆委員（2017年3月）

### 科学研究費

1994年度～1996年度（平成6年度～8年度） 基盤研究（C）(2)

研究課題名「沖縄の日本復帰に関する研究」

研究代表者：荒川章二，1,500千円

1998年度～2001年度（平成10年度～13年度） 基盤研究（A）

研究課題名「情報化社会における地域産業・社会の階層構造変容と地域住民の生活変容—広域圏内での静岡県浜松市の比較調査研究—」

研究代表者：鎌田哲宏（研究分担者8名のうちの1人として参加），29,100千円

2004年度～2006年度（平成16年度～18年度） 基盤研究（C）(2)

研究課題名「戦後日本の軍事基地と地域社会—東富士・浜松・沖縄—」

研究代表者：荒川章二，2,600千円

2008年度～2010年度（平成20年度～22年度） 基盤研究（C）

研究課題名「軍用地研究—戦時の拡大から戦後の変容へ—」

研究代表者：荒川章二，2,100千円

2012年度～2015年度（平成24年度～27年度） 基盤研究（C）

研究課題名「軍都としての帝都東京—明治・大正期を中心に—」

研究代表者：荒川章二，3,700千円

2016年度～2018年度（平成28年度～30年度） データベース科研

研究課題名「1960年代以降の学生運動と大学改革に関するデータベース」

東京大学文書館デジタルアーカイブズ作成委員会（研究代表者：吉見俊哉）

2017年度～2019年度（平成29年度～31年度） 基盤研究（C）

研究課題名「帝国日本と植民地災害—日本植民地時代の台湾震災史を中心に—」

研究代表者：荒川章二，2,900千円

---

## 荒川章二研究業績目録

### I 著書 (編著, 共著を含む)

1. 荒川章二・河西英通・坂根喜弘・坂本悠一・原田敬一編『地域のなかの軍隊 第8巻 基礎知識編 日本の軍隊を知る』吉川弘文館, 2015年6月 \*直接執筆は「陸軍の部隊と駐屯地・軍用地」pp.50-80
2. 編著『地域の中の軍隊2 関東 軍都としての帝都』吉川弘文館, 総頁201頁, 2015年2月
3. 熊本近代史研究会編『第六師団と軍都熊本』, 創流出版, 2011.3, 総頁508頁, 共著, (荒川直接執筆「第六師団の歴史と地域社会」(総論), pp.14-46)
4. 国立歴史民俗博物館・安田常雄編『歴博フォーラム 戦後日本の大衆文化』, 東京堂出版, 2010.9, 総頁256頁, 共著, (荒川直接執筆「大衆文化からみた戦後の日本社会」(基調講演), pp.23-61, およびpp.131-147 パネルディスカッション)
5. 荒川章二・村瀬隆彦・竹内康人+静岡大学生涯学習センター編『浜松の戦争遺跡を探る』(静岡大学公開講座ブックレット2) 2009.11, 総頁75頁, 共著, (荒川直接執筆「浜松の陸軍基地」, pp.3-24)
6. 荒川章二『全集日本の歴史第16巻 豊かさへの渴望』, 小学館, 2009.3, pp.1-386, 単著
7. 荒川章二『軍用地と都市・民衆』(日本史リブレット95), 山川出版社, 2007.10, pp.1-107, 単著
8. 荒川章二・笹原恵・山道太郎・山道佳子『浜松まつり—学際的分析と比較の視点か岩田書院, 2006.3, 総頁319頁, 共著, (荒川直接執筆 pp.13-69「浜松まつりの歴史的形成」, 123-156「戦後版浜松まつりの成立と発展」, 317-319「あとがき」)
9. 荒川章二『軍隊と地域』, 青木書店, 2001.7, pp.1-358, 単著
10. 静岡県近代史研究会編『近代静岡の先駆者』, 静岡新聞社, 1999.10, 総頁390頁, 共著, (編集責任, 直接執筆箇所は, 序および「伊豆が生んだ大正期政界の策士/小泉三申」pp.205-224)
11. 藤原彰・荒川章二・林博史『新版日本現代史』, 大月書店, 1995.8, 総頁416頁, 共著, (直接担当及び執筆, pp.2-89「占領下の日本」, 215-241「社会構造の変化」, 319-355「経済大国の内実」)
12. 吉田裕・小田部雄次・功刀俊洋・荒川章二・荒敬・伊藤悟『敗戦前後—昭和天皇と5人の指導者』, 青木書店, 1995.6, 共著, 総頁267頁, (直接執筆は, 「第5章 片山哲—社会民主主義者の民主主義「再発見」」pp.133-178)
13. 静岡県近代史研究会編『史跡が語る静岡の十五年戦争』, 青木書店, 1994.8, 総頁156頁, 共著, (編集責任, まえがき pp.3-4, 総論「十五年戦争と静岡県」pp.11-22, 及び一部項目執筆)
14. 藤原彰・荒川章二・林博史『日本現代史』, 大月書店, 1986.6, 共著, 総頁370頁, 直接執筆は, 「占領政策の転換」・「朝鮮戦争とサンフランシスコ条約」pp.72-117, 「国際社会への復帰と経済発展」・安保改定と反対運動 pp.158-196, 「沖縄返還と70年安保」・「高度成長の終焉」pp.238-285  
\*韓国語訳(1991.10)

### II 論文 (断りのない限り単著論文)

1. 「近現代山口県の人的ネットワーク—県外県人団体を中心として—」『山口県史研究』第26号, 2018.3.
2. 「「1968」大学闘争が問うたもの—日大闘争の事例に即して」, 大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』698, 法政大学出版局, pp.1-24, 2016年12月1日
3. 「「戦後日本」の問い方をめぐって」『歴史学研究』920号, pp.35-45, 2014年7月(依頼論文)
4. 「地域のなかの一九六八年」, 安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史3 社会を問う人々—運動のなかの個と共同性』, 岩波書店, 2012.12, pp.226-257
5. 「〈軍隊と地域〉関係史の「発見」—歴史を研究することと地域生活体験」, 宮城歴史科学研究会『宮城歴史科学研究』第70号, 2012.5, pp.1-19
6. 「東富士演習場と地域社会—占領期の基地問題—」, 粟屋憲太郎編『近現代日本の戦争と平和』, 現代史料出版, 2011.2, pp.431-482

- 
7. 「基地の起源と自治体・地域社会」, 東京市政調査会『都市問題』第101巻11号, 2010.11, pp.38-46
  8. 「兵士が死んだ時—戦死者公葬の形成—」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』第147集, 2008.12, pp.35-63
  9. 「現代日本と地域社会—郊外開発と地域開発を例に」, 現代社会構想・分析研究所『現代社会の構想と分析』第6号, 2008.7, pp.47-68
  10. 「軍用地の形成・展開」, 静岡県近代史研究会『静岡県近代史研究』第32号, 2007.10, pp.1-48
  11. 「兵士たちの男性史—軍隊社会の男性性」, 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史』2巻, 日本経済評論社, 2006.12, pp.114-141
  12. 「兵士と教師と生徒」, 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史』第1巻, 日本経済評論社, 2006.12, pp.13-46  
\* 同論文の一部が, 平成21年度法科大学院適性試験(追試験)問題として使用される。
  13. 「新沖縄県平和祈念資料館設立をめぐって」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』第126号, 2006.1, pp.133-190
  14. 「日本近代史における戦争と植民地」, 『岩波講座アジア・太平洋戦争』(全8巻シリーズ)第1巻, 岩波書店, 2005.11, pp.163-198
  15. 「昭和恐慌期の静岡県」, 清水郷土史研究会『清見湯』第13号, 2004.5, pp.1-21
  16. 「戦争・軍隊史研究とオーラルヒストリー」, 日本の戦争責任資料センター『季刊戦争責任研究』第45号, 2004.9, pp.2-17
  17. 「特集 開戦100年 日露戦争再考」『論座』朝日新聞社, 2004.9, pp.182-189
  18. 「地域史としての日露戦争—陸軍輸送拠点・広島から」, 小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』, 紀伊国屋書店, 2004.2, pp.88-111
  19. 「規律化される身体」, 『岩波講座近代日本文化史第4巻 感性の近代』, 岩波書店, 2002.2, pp.169-204  
\* 2012.9韓国語版
  20. 「占領の「清算」と新しい社会運動」, 歴史学研究会『歴史学研究』No.768, 2002.10増刊号(大会報告特集), pp.118-126
  21. 「歴史のなかの地域とネットワーク・情報」岡田安功・藤井史朗編『情報社会の見える人, 見えない人』, 公人社, 2000.10, pp.257-266
  22. 「小泉策太郎—1920年代の政界策士」, 静岡県近代史研究会『静岡県近代史研究』第25号, 1999.10, pp.21-39
  23. 「沼津市今沢米軍基地の半世紀」, 『沼津市史研究』第8号, 沼津市教育委員会, 1999.3, pp.1-60
  24. 「小林よしのり『戦争論』批判」『論座』朝日新聞社, 1998.12, pp.192-197
  25. 「総動員体制と戦時法制」, 『沖縄戦研究I』, 沖縄県教育委員会, 1998.10, pp.132-178
  26. 「沖縄—同化的平和から自立・共生的平和へ」, 歴史学研究会『歴史学研究』第676号, 1995.10, pp.15-25, 47
  27. 「中国帰還者連絡会静岡支部の人々(1) 岩崎賢吉の足跡」(下), 静岡県近代史研究会『静岡県近代史研究』第21号 1995.8, pp.59-104
  28. 「中国帰還者連絡会静岡支部の人々(2) 根上民夫の足跡」, 『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学編)』第45号 1995.3  
\* 論説資料保存会『中国関係論説資料』第37号(平成7年分)収録
  29. 「台湾植民地と郷土兵」, 『沼津市史研究』第4号, 沼津市教育委員会, 1995.3, pp.91-115  
\* 学術文献刊行会『日本史学年次別論文集 近現代2 1995年(平成7)』に収録
  30. 「国民精神総動員と大政翼賛運動」, 由井正臣編『近代日本の軌跡5 太平洋戦争』(全10巻シリーズ), 吉川弘文館, 1995.1, pp.139-165
  31. 「中国帰還者連絡会静岡支部の人々(1) 岩崎賢吉の足跡」(上), 静岡県近代史研究会『静岡県近代史研究』第20号, 1994.10, pp.14-57
  32. 「静岡県における初期兵事行政と徴兵援護団体の形成」, 『静岡県史研究』第8号, 静岡県教育委員会, 1992.3, pp.91-105
  33. 「日本型大衆社会の成立と文化の変容」, 歴史学研究会編『日本同時代史 4 高度成長の時代』(全5巻), 青木書店, 1990.12, pp.191-242
-



- 
34. 「安保闘争は挫折だけを残したのか」, 藤原彰・今井清一・宇野俊一・粟屋憲太郎編『日本近代史の虚像と実像』第4巻(全4巻), 大月書店, 1989.12, pp.203-224  
 \*『歴史地理教育』470号(現代史50問50答), 1991.3, に要旨採録, pp.52-53  
 \*歴史教育者協議会編『100問100答 日本の歴史6現代』, 河出書房新社, 1995.7 に要旨採録, pp.137-141
35. 「総動員体制と民衆—都市と農村」(田崎宣義と共著, 荒川が都市および総括), 藤原彰・今井清一編集『十五年戦争史2 日中戦争』(全4巻), 青木書店, 1988.7
36. 「日中戦争期の労働者」, 『大原社会問題研究所雑誌』第349号, 法政大学大原社会問題研究所, 1987.12, pp.1-27
37. 「地方労働運動史研究の現状(1)~(5)」, 『大原社会問題研究所雑誌』, 法政大学大原社会問題研究所  
 第356号, 1988.7, pp.4-21, および「特集にあたって」pp.1-3  
 第362号, 1989.1, pp.3-20  
 第369号, 1989.8, pp.3-21  
 第375号, 1990.2, pp.3-11  
 第377号, 1990.4, pp.33-49  
 \*法政大学大原社会問題研究所ワーキングペーパー21号『地方社会運動史・労働運動史研究の現状—1990年代初頭までを中心に』(2005.3, 全268頁)に一括収録
38. 「戦時下の労働者統合一八幡製鉄所産業報告会を事例として—」, 日本現代史研究会編『日本ファシズム(2) 国民統合と大衆動員』, 大月書店, 1982.7, pp.103-132
39. 「無産政党の地域政策・地域闘争」, 鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第4巻(全4巻), 日本評論社, 1982.6, pp.101-134
40. 「一九二〇年代の右翼的労働運動—日本海員組合を中心に—」, 日本史研究会『日本史研究』第218号, 1980.10, pp.1-31

### Ⅲ 研究史整理・学会展望・学会批評

- 2014年度歴史学研究会大会現代史部会コメント, 『歴史学研究』924号, pp.133-136, 2014年10月増刊号
- 「近現代部会共同研究報告によせて」(『日本史研究』第608号, pp.41-45, 2013.4月)
- 「高度経済成長期研究の現状と展望」, 歴史科学協議会編『歴史評論』第752号, 2012.12, pp.36-49
- 「2009年歴史学研究会大会報告批判(現代史部会)」, 『歴史学研究』第861号, 2009.11, pp.41-43
- 「2006年の歴史学界—回顧と展望」, 史学会『史学雑誌』第116編第5号, 2007.5, 戦前期政治史関係, pp.156-158, 162-165
- 「軍用墓地研究の課題」, 大阪歴史科学協議会『歴史科学—創立40周年記念特集号』179・180合併号, 2005.5, pp.110-114
- 「地方史研究の現状29 静岡県」(原秀三郎・湯之上隆ら7名と共著), 日本歴史学会編『日本歴史』590号, 吉川弘文館, 1997.7, pp.38-65
- 「1990年の歴史学会—回顧と展望」, 史学会『史学雑誌』第100編第5号, 1990.5, 戦後日本史担当 pp.191-197
- 「1987年度歴史学研究会大会批判 現代史部会(渡辺治報告)」, 『歴史学研究』575号, 1987.12, pp.55-56

### Ⅳ 自治体史(通史編及び資料編)・翻刻・教科書

- 執筆分担『沖縄県史各論編6 沖縄戦』新沖縄県史編集委員会, 総頁773頁, 沖縄県, pp.3-29, 2017.3
  - 共編著:『戸田村史』戸田村史編纂委員会, 723頁, 沼津市, 直接執筆 pp.253-703, 2016.3(実際の出版は2017.3)
  - 編著(編集責任者):『山口県史史料編現代5(政治社会編)』山口県史編纂委員会, 1018頁, 山口県, 2017.3  
 \*直接担当:第1編第1章第1~3節, 第2編第1章第1~3節, 第3編第1章第1~2節, 第4編第1章第1~2節
  - 共著『新日本史 A』(実教出版, 高等学校地理歴史教科書)2014年3月(戦後史関係を執筆)
  - 『静岡県史 資料編29 近現代八(富士山静岡空港)』(pp.161-177「島田・榛原地区の住民の対応」, pp.227-250「空域調整での防衛庁への申入れ」・「吉田町の空域への関心」, pp.258-270「用地買収の始動」, pp.342-400
-

- 
- 「空港設置と地域住民運動」,pp.401-475「地域要求とその対策」, および対応する解説頁, 2014.3)
6. 小和田哲男・天野忍・荒川章二・江崎善三郎・織田元泰編『輝く静岡の先人』静岡県(「第24回国民文化祭・しずおか2009」協力事業), 2009.10, 総頁108頁, 共編著,(荒川担当:執筆基準作成, 人物選定, 及び一部項目執筆)
  7. 『沼津市史 通史編 現代』, 沼津市, 2009.3, 共著, 執筆箇所:「政党・社会運動の復活と占領期の選挙」pp.53-82,「一九五五年体制と沼津政界」pp.196-212,「地域開発政策と石油化学コンビナート反対運動」pp.296-319,「市民運動と革新自治体の時代」pp.360-377
  8. 『竜洋町史 通史編』磐田市, 2009.3, 監修・執筆, 総頁894頁, 執筆箇所「金融業の早期生成とその背景」pp.390-396,「新町村の成立と旧村の自治慣行」pp.408-435,「日清・日露戦争と行政村の実体形成」「義務教育確立期の尋常小学校・高等小学校」pp.459-494,「町村制の定着と官製国民運動の展開」pp.516-532,「生活の近代化と人々の集団化」「学校経営への評価と学校経営の改革」pp.548-572,「敗戦処理と占領期の行財政」「飛平松・天竜川東派川麻川敷開拓と供出」pp.676-698,「竜洋中学校の発足と磐田農高竜洋分教場」「掛塚橋改築期成同盟会と永久橋の架設」pp.712-733
  9. 『沼津市史 通史編 近代』, 沼津市, 2007.3, 共著, 執筆箇所:「日清・日露戦争と地域社会」pp.167-181,「満州事変と地域の軍事化」pp.364-377,「労働・農民運動の成立」pp.378-388,「翼賛運動」pp.420-429,「海軍の町沼津への変貌」pp.430-438,「戦場動員と銃後の生活」pp.471-486,「本土決戦体制」pp.525-539
  10. 『竜洋町史 資料編Ⅰ 原始・古代・中世・近世』, 磐田市, 2007.3, 本編586頁の監修
  11. 『基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」翻刻資料集3 日中戦争派遣兵士の軍事郵便』(本編1-98頁につき監修, および99-115頁の解題), 国立歴史民俗博物館, 2007.3
  12. 『竜洋町史 資料編Ⅱ 近現代』, 磐田市, 2006.3, 本編674頁および別編212頁につき監修および分担編集・解説
  13. 『基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」翻刻資料集1』pp.1-176『皇国之礎』部分の翻刻と解題, 国立歴史民俗博物館, 2005.3.
  14. 『沼津市史 資料編 現代』, 沼津市, 2005.3, 共同編集, 総頁973頁
  15. 『伊豆長岡町史 下巻』, 伊豆長岡町, 2005.3, 本巻監修及び執筆, 総頁720頁
  16. 『沼津市史 史料編 近代2』, 沼津市, 2001.3, 共同編集, 総頁859頁
  17. 『静岡県史 通史編7 年表』, 静岡県, 1998.3, 共著, 総頁569頁
  18. 『沼津市史 史料編 近代1』, 沼津市, 1997.3, 共同編集, 総頁826頁
  19. 『静岡県史 通史編6 近現代2』静岡県, 1997.3, 共著, 総頁1167頁, 分担執筆箇所:「政党政治の展開と衰退」pp.3-37「満州事変の衝撃と地域住民統合の本格化」pp.67-80,「翼賛政治体制の確立」pp.181-225,「戦時社会行政」pp.246-253,「戦争遂行体制」pp.435-441,「敗戦」pp.453-456,「労働組合運動の高揚と再編」pp.615-624,「春闘の定着と労使一体的労働運動の成長」pp.844-850,「総評県評から連合静岡へ」pp.1087-1093
  20. 『静岡県史 通史編5 近現代1』静岡県, 1996.3, 共著, 総頁1008頁, 分担執筆箇所:「徴兵制の改正」「日清戦争と静岡歩兵第三十四連隊の設置」pp.307-326,「日露戦争と地域社会」pp.500-528,「軍縮と軍の近代化」pp.752-774
  21. 『国立歴史民俗博物館資料調査報告書14 戦争体験の記録と語りに関する資料調査3』, 国立歴史民俗博物館, 2005.3, 担当箇所: pp.1411-1493
  22. 『静岡県史 資料編21 近現代6』, 静岡県, 1994.3, 共同編集, 総頁1332頁
  23. 『静岡県史 資料編20 近現代5』, 静岡県 1993.3, 責任編集, 総頁1234頁
  24. 『静岡県史 資料編18 近現代3』, 静岡県 1992.3, 共同編集, 総頁1171頁
  25. 『静岡県史 資料編19 近現代4』, 静岡県 1991.3, 共同編集, 総頁1311頁
  26. 『豊島区議会史 通史編』, 豊島区役所, 1987.3, 共著, 執筆箇所:「副都心化の推進と豊島区再開発構想」および「区民要求の多様化・住民運動の広がり」と区議会」pp.579-784
  27. 『豊島区議会史 資料編Ⅱ』, 豊島区役所, 1985.2, 共同編集, 総頁521頁
  28. 『豊島区議会史 資料編Ⅰ』, 豊島区役所, 1985.2, 共同編集, 総頁913頁
-

- 
29. 『豊島区史 通史編』第2巻, 豊島区役所, 1983.11, 共著, 執筆箇所:「都市化の進展」pp.417-461, 「社会運動と社会事業」pp.548-693, 「戦時下の区民生活」pp.1024-1113, 「敗戦と豊島区」pp.1214-1278
  30. 『豊島区史 年表編』, 豊島区役所, 1982.3, 共著, 総頁 408 頁, 1945～1975 担当
  31. 『豊島区史資料編 4』, 豊島区役所, 1981.6, 主任調査員 4 名の共同編集, 総頁 1485 頁

## V 図録, 総合誌『歴博』等

1. 「国立台湾歴史博物館「地震帯上の共同体:歴史中的臺日震災特別展」によせて一国際協力の台日震災史共同展示として一」『地震帯上の共同体 歴史の中の日台震災』pp.5-8
2. 「戦後史における「1968年」『歴博』205号, 2017.11, pp.15-18
3. 図録『企画展示「1968年」無数の問いの噴出の時代』, 編集・執筆, 総頁 228 頁, 2017.10
4. 「歴史への招待状「1968年」—無数の問いの噴出の時代」『歴博』204号, 2017.9, pp.24-25
5. 「特集展示 台湾と日本—震災史とともにたどる近現代」『歴博』200号, p.31, 2017.1
6. 特集展示図録『台湾と日本』編集・執筆, 総頁 95 頁, pp.1-74 を執筆, 2017.1
7. 国立歴史民俗博物館『戦争をめぐるパブリックヒストリー—ドイツ・日本 歴史博物館の対話』編集委員, 109 頁, 2017.3
8. 総合誌『歴博』192号(2015.9) 編集責任, 特集解説(p1) および歴史の証人「歴博と社会運動・学生運動資料」(pp.20-23) 執筆
9. 2015年度企画展示図録『ドイツと日本を結ぶもの—日独修好150年の歴史—』第3章第1節 第2項「日独戦争とドイツ人捕虜」, 第3章第3節第2項「ナチス台頭と日独の接近」の資料解説
10. 総合誌『歴博』189号(2015.3) 編集責任, 特集解説(p1), および「帝国日本」時代の地球儀」(pp.20-23) 執筆
11. 2013年度企画展図録『歴史にみる震災』(2014.3)「コラム 26」pp.132-135
12. 2006年度企画展示批評「佐倉連隊に見る戦争の時代」(『歴博』139号, 2006.11, p.30)

## VI 辞典・年表・資料集

1. 法政大学大原社会問題研究所編集『社会労働大年表』旬報社, 2011.2, 項目執筆
  2. 永原慶二・朝尾直弘ほか編集代表『日本歴史大辞典』全4巻, 小学館, 「浅沼稻次郎」, 「下山事件」など 21 項目執筆 2000.6～2001.3
  3. 「ふるさと人国記 60 静岡県(上)」『朝日クロニクル 週刊 20世紀』65号, 朝日新聞社, 2000.5.7, pp.28-29
  4. 木村礎・林英夫編『地方史研究の新方法』, 八木書店, 2000.12, pp.232-234 項目執筆「地域の戦争遺跡を探る」pp.226-227
  5. 『岩波 日本史辞典』, 岩波書店, 1999.10, 「徴兵検査」など 32 項目執筆
  6. 地方史研究協議会編『地方史事典』, 弘文堂, 1997.4, 「戦争遺跡」執筆
  7. 『歴史学辞典 第4巻 民衆と変革』, 弘文堂 1996.12, 「消費者運動」執筆
  8. 『新版 角川日本史辞典』, 角川書店 1996.11, 項目執筆: 労働組合系統図他
  9. 『角川日本姓氏歴史大事 22 静岡県姓氏家系大辞典』, 角川書店, 1995.12, 編纂委員, 項目執筆
  10. 『昭和 20年 1945年』小学館, 1995.6, 藤原彰, 粟屋憲太郎・吉田裕編, 項目執筆
  11. 『まんが日本の歴史 8 新しい日本への道』, 小学館, 1992.7, 田村貞男・黒羽清隆・荒川章二監修
  12. 『現代日本朝日人物辞典』, 朝日新聞社, 1990.12, 項目執筆
  13. 海員史話会編『聞き書き 海上の人生 大正・昭和船員群像』, 農山漁村文化協会, 1990.11, 共著, 総頁 282 頁, 執筆は第二章「出稼ぎ船員の村に生まれて」のうち pp.170-185, 201-203, 206-209
  14. 『日本大百科全書』全 25 巻, 小学館, 1988.11, 項目執筆
  15. 法政大学大原社会問題研究所編『社会・労働運動大年表』第1巻(戦前編), 労働旬報社, 1986.12, 共編著, 総頁 385 頁中の政治欄および社会運動欄の編集担当, および解説項目執筆
  16. 吉田裕・伊藤悟・林博史・額額厚・桜井泉・市原博・荒川章二・三浦陽一「現代史カレンダー戦争と平和の 366 日」, 東研出版 1984.6, 総頁 220 頁
  17. 神田文人編集・解説『資料 日本現代史 7 産業報国運動』, 大月書店 1981.10, 総頁 616 頁, 担当箇所:
-

---

第1部編集 pp.4-186, 「資料解題」 pp.561-570, 「解説」 pp.584-600

18. 都労連 30周年記念事業実行委員会編『都労連 30年の歩み』, 東京都労働組合連合会, 1977.1, 共著, 第一編「たたかう 30年の歴史」 pp.15-113 の通史部分担当

## Ⅶ 書評・時評 (学会誌など掲載分)

1. 日本歴史学会『日本歴史』834号, 2017.11, 口絵解説
2. 書評/小林啓治著『総力戦体制の正体』, 『歴史評論』808号, 2017.8, pp.81-86
3. 書評/吉田律人著『軍隊の対内的機能と関東大震災—明治・大正期の災害出動—』, 『日本史研究』659号, 2017.7, pp.63-68
4. 書評/山田朗著『昭和天皇の戦争—「昭和天皇実録」に残されたこと・消されたこと』, 『季論 21』, 2017年夏, pp.203-206
5. 書評/山田朗著『近代日本軍勢力の研究』, 『日本歴史』829号, 2017.6, pp.111-113
6. 東京点画「近代軍都としての首都東京」, 『東京人』(都市出版)2015.10.p9
7. 書評/「田崎宣義編著『近代日本の都市と農村—激動の1910—50年代』」, 『人民の歴史学』197号, 2013.9, pp.82-86
8. 書評/森武磨編著『1950年代と地域社会—神奈川県小田原地域を対象として—』, 『同時代史研究』3号, 2010.12 pp.113-117
9. 書評/『青森県史資料編近現代2日清・日露戦争期の青森県』, 『国史研究』116号, 弘前大学国史研究会, 2004.3, pp.67-70
10. 「研究資料 軍隊経験はどんなものだったのか」, 『日本史 A 指導資料』, 東京書籍, 2003, p.167
11. 「引佐町渋川の「凱旋記念門」についての少考 (1) (2)」, 『静岡県近代史研究会会報』No295, pp.1-2, 2003.4, No296, pp.1-2, 2003.5
12. 書評/「黒羽清隆『日本史料講読 日米開戦・破局への道』を読む」(1) (2), 『静岡県近代史研究会会報』, No293, p.1, 2003.2, No294, pp.2-3, 2003.3
13. 「軍事基地と地域民衆—戦前・戦後, 東富士から」, 歴史書懇話会編『歴史書通信』No142, 2002.7, pp.2-4
14. 書評/歴史科学協議会『日本現代史』, 『歴史評論』626号, 2002.6, pp.104-110
15. 書評/上山和雄編『帝都と軍隊』, 『史学雑誌』111号第12号, 2002.2, pp.85-93
16. 書評「上山和雄編/帝都と軍隊」, 『図書新聞』No2588 2002.7.6
17. 「地域社会はどう軍隊を受容したのか」, 『週刊金曜日』381号, 2001.9.28, p.39
18. 書評/「裾野市史 資料編近現代Ⅱ」, 『裾野市史研究』第12号, 2000.3, pp.28-36
19. 紹介/「梅田俊英『社会運動と出版文化—近代日本における知的共同体の形成』」, 『日本史研究』445号, 1999.9, pp.80-81
20. 書評/高野房太郎著・二村一夫解説『明治日本労働通信』(岩波文庫版), 『賃金と社会保障』(労働旬報社), 第1211号, 1997.10上旬, pp.58-59
21. 書評/大原社会問題研究所編『証言・産別会議の研究』, 『賃金と社会保障』1187号 1996.10, pp.32-33
22. 書評/横浜市史編集室編『横浜市史Ⅱ・資料編5—戦時戦後の企業と労働』, 『市史研究よこはま』第9号, 1996.3, pp.123-127
23. 「「沖縄占領国際シンポジウム」に参加して」, 『歴史学研究』645号, 1993.5, pp.28-31
24. 書評/三輪泰史著『日本ファシズムと労働運動』, 『歴史評論』468号, 1989.4, pp.91-98
25. 書評/草間八十雄著『近代下層民衆生活史』(全3巻), 『大原社会問題研究所雑誌』355号, 1988.6, pp.70-72
26. 「例会報告 1988年3月 地方労働運動史研究の現状」, 『労働運動史研究会会報』18号, 1989.5, pp.1-2
27. 紹介/角岡田賀男編『海上労働運動不屈の歩み』, 『日本史研究』256号, 1983.12, pp.88-83
28. 「地下鉄モグラ争議 50周年同窓会参加記」, 『歴史評論』377号, 1981.9, p.75

---

**Ⅷ 講演等（歴博在職中）**

1. 第 26 回山口県史講演会「近現代山口県の人的ネットワーク—県外県人団体を中心として—」2017.11.18, 於：山口県教育会館ホール
2. 第 404 回歴博講演会「全共闘とは何だったのか—歴博所蔵資料から見える世界—」, 2017.11.11, 於：歴博講堂
3. 第 107 回歴博フォーラム「戦後社会運動の中の「1968 年」」, 2017.10.21, 於：歴博講堂（開催責任者）
4. 「台湾と日本—震災史とともにたどる近現代—」展：東アジアにおける地震史と植民地時代史（国立台北芸術大学主催，国立台湾歴史博物館共催：フォーラム「負歴史遺産，當代歴史意識與博物館」2017.7.14 於：国立台湾歴史博物館
5. 「佐倉連隊—戦争と平和—」, 第 6 回平和首長会議国内加盟都市会議総会平和講演会，佐倉市主催，2016.11.7, 於：佐倉市民音楽ホール
6. 「佐倉の軍隊 —軍事都市から文化都市へ—」, 平成 28 年度佐倉・城下町 400 年記念事業第 3 回佐倉学リレー講座，佐倉市，2016.10.1
7. 「1935 年中部臺灣大地震—被害・救援・復興—」国立台湾歴史博物館・日本国立歴史民俗博物館共催：2015 年「東亜地震歴史與物質文化展示」博物館交流工作坊。2015.11.22 於：国立台湾歴史博物館
8. 佐倉市権擁護委員協議会研修会講演「歴博展示から人権を考える—被差別部落・アイヌ関係の展示を例に—」2014 年 11 月 19 日，於：国立歴史民俗博物館
9. 金沢大学大学祭講演会「日本陸軍の変遷と地域社会」2014 年 11 月 3 日，於：金沢大学
10. 佐倉市教育委員会人権教育講座「夏休み！歴博で人権を学ぼう」, 2014 年 7 月 24 日，於：国立歴史民俗博物館第 5 展示室
11. 平成 26 年度第 3 回沼津史談会市民公開講座「戦時下の沼津—海軍工廠・海軍技研・特攻基地化—」2014.6.21, 於：沼津市立図書館視聴覚ホール
12. 第 366 回歴博講演会「帝都の軍隊」, 2014.6.14, 於：国立歴史民俗博物館講堂
13. 歴博友の会歴史学講座「軍用地と都市・民衆生活—陸軍を中心に—」2014.5.9, 於：歴博ガイダンスルーム
14. 講演「沼津市制 90 年の歩み—戦中・占領期から高度成長期の沼津市政界—」沼津市明治史料館歴史講座，会場：沼津市明治史料館講堂，2014 年 1 月 25 日
15. 『歴史文化講座「日本の現代」』敬文舎主催，東京堂ホール，全 8 回のうち  
第 4 回「安保と日本国憲法」2013 年 10 月 16 日  
第 7 回「ヴェトナム戦争と住民運動」2013 年 11 月 6 日
16. 「佐倉の軍隊—平時と戦時—」印旛都市文化財センター主催，2013.9.11, 於：佐倉市民音楽ホール,